

Japanese Journal of Gambling & Gaming Studies

ギャンブリング*ゲーミング学研究

第3号

2007. 3

論 説

- | | |
|------------------------------|-----------|
| 将棋駒の文化論「駒はなぜ5角形か」 | 熊澤良尊 (1) |
| 釘一本に魂を込めろ！正村竹一にはじまるパチンコの生い立ち | 鈴木笑子 (7) |
| カジノビジネスにおけるマネーロンダリング対策 | 中條辰哉 (24) |
| カジノによる地域集客戦略 | 橋爪紳也 (35) |
| もうひとつの競馬・ばんえい(輓曳) | 古林英一 (47) |
| 将棋と宗教 | 湯川博士 (67) |

ギャンブリング*ゲーミング学会

Japan Academy of Gambling & Gaming Studies

もうひとつの競馬・ばんえい（輓曳）

北海学園大学経済学部教授 古 林 英 一

1. はじめに

周知のように、わが国では馬券発売をとまなう競馬は競馬法その他の法令によって規制されている。競馬施行令第5条では、中央競馬会が実施するのは「平地競走、速歩競走及び障害競走の三種」と定められ、第17条の4では都道府県または指定市町村が開催する競馬、すなわち地方競馬の競走種目は「平地競走、速歩競走、障害競走及びばんえい競走の四種」と定められている。つまりばんえい（輓曳）競走は地方競馬だけに開催が許されている競馬である。ちなみに、現在、速歩競走は中央・地方ともにおこなわれていない。

2006年度まで、ばんえい競馬を主催していたのは、北海道の旭川市、岩見沢市、北見市および帯広市の4市だけである。この4市は一部事務組合である北海道市営競馬組合（以下、市営競馬組合）を結成し、実際の開催業務はこの市営競馬組合が担当していた。

馬券収入の低迷から、ばんえい競馬の存廃問題が持ち上がり、北海道開拓の歴史が生んだ、そして日本人が生み出した、世界で唯一ともいわれるユニークな競馬であるばんえい競馬が存続の危機に立たされている。本稿が本学会の会員諸氏の手が届く頃には、「わが国にはばんえい競馬という競馬もあった」ということになってしまっている可能性も高い。

本稿は、世界にも類例をみないわが国独自の競馬でもあるばんえい競馬の沿革やレースの形態などについて解説し、あわせてその楽しみ方を紹介しようとするものである。なお、本稿は2005年秋におこなったギャンブリング*ゲーミング学会での報告をもとに、それ以降の状況をふまえ加筆したものである。

2. 「ばんえい」という競馬

①コースと競馬場

ばんえい（輓曳）とは馬で櫓や馬車を牽引することを意味する。ばんえい競馬とは重量物を積載した櫓を牽引した馬による競走である。ばんえい競馬のコースは平地競馬とは全く異なっており、旭川、岩見沢、北見、そして帯広の4場はいずれも直線200メートルの10頭立てセパレート

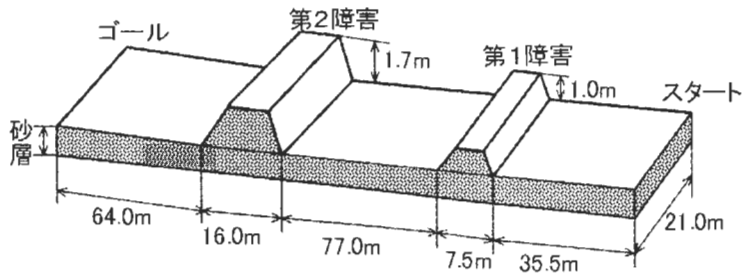


図1 ばんえい競馬のコース (帯広競馬場)

コースである。コースの途中に大小2か所の堤防状の山が設置されており、競走馬はこのふたつの山を越えてゴールをめざす。スタートに近く小さい方の山を1障害、ゴールに近く大きい方の山を2障害とよぶ。

図1は帯広競馬場のコースである。4場のコースはいずれも直線200メートルで、基本的な形状は同様であるが、障害の設置位置や障害の形状(坂の勾配・頂上の平坦部の形状)が異なっていたり、また、使用されている砂の質に差違ある。このため、コースの得手不得手が生じ、コースごとの成績が極端に変わる馬もいる。

ばんえい競走馬に要求される資質は何よりも牽引力(輓曳力)である。ばんえい競走馬に要求される牽引力は、今から40年ほど前までは、森林、鉱山、近距離輸送、それに農耕など、わが国の広範な産業分野で使役されていた馬に求められる資質であった。

近年では、春の旭川で開幕し、夏から秋にかけて岩見沢、晩秋の北見、そして冬季の帯広というローテーションがとられ、ばんえいは北海道の四季とともに4市を転戦しながら開催されてきた。

②装鞍所からパドックへ(馬具と馬装)

ばんえいは、人が馬に騎乗するのではなく、櫓の上から馬を御する。騎乗して馬を御する人を騎手 jockey といい、馬車や櫓の上から馬を御するのは馭者(ぎよしゃ) driver という。したがって、ばんえいの場合には騎手ではなく、正しくは馭者というべきなのだろうが、馬を御する人はばんえいでも騎手とよんでいる。

競走当日、レースに出走する馬は装鞍所に



写真1 装鞍所(岩見沢競馬場)

集合する。鞍を装着するわけではないので、装鞍所というもおかしいが、検量や出走馬の照合、馬具の装着をおこなう場所はばんえいでも装鞍所という（写真1は岩見沢競馬場の装鞍所）。

装鞍所で馬体検査がおこなわれ馬具が装着される。ばんえいでは他の競馬では見られない独特な馬具が装着される。いずれも橇や馬車を曳くために昔から使われてきた馬具である（写真2）。橇はスタートライン近くで連結される。

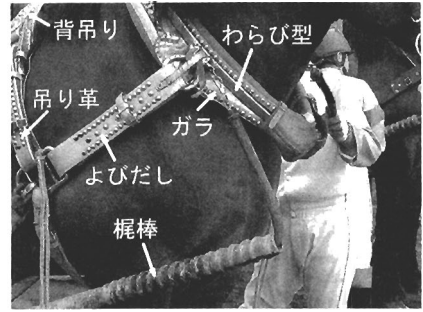


写真2 馬具

装鞍所で馬装を整えた出走馬はパドックに姿を現す。ここでの歩様や気配が馬券推理のひとつのファクターになるのはばんえいも平地も同じである。一般に、胸を反らし、目を輝かせ、しっかりと歩いている馬が良いとされる。

パドックに出てきた馬でもっとも目につく馬具はガラとよばれる馬具であろう。ガラは橇を牽引するときに肩を保護し、かつ肩全体に負荷を分散させるために装着する馬具で英語では collar である。英語の collar が訛ってガラになったといわれている。ガラはワラビ型とよばれる鉄製の金具で馬体にしっかり固定されている。

馬が産業界で活躍していた時代にはガラや背吊りをつくる職人も数多くいたのだが、現在、ばんえい競馬で使用される実用的なガラや背吊りをつくることのできる職人は数人しかおらず、それも高齢化がすすんでいる。この点も今後問題となろう。

③本馬場入場から発走へ（橇の装着）

平地競馬の場合は馬が本馬場にはいってから厩務員が馬から離れる。したがって、パドックにいるあいだは厩務員は馬をひいている。ばんえいの場合、騎手が馬に騎乗したら厩務員はパドックから姿を消す¹⁾。パドックから姿を消した厩務員はマイククロバスでスタートライン付近に向かい、橇の装着の準備にかかるのである。

現在のばんえい競馬では重さ420kgの鉄橇が使用される。かつて産業界で実際に使われていたのは殆どが柴橇とよばれる木橇であった。木橇は割れやすく、水分を含む



写真3 橇

1) 映画「雪に願うこと」では厩務員が最後までついてるが、これは実際と異なることを承知の上で、演出上敢えてそういうかたちをとったものであるという。

と重量が大きく変動し、公正競走の確保という点で難点があったため、1970年代になって鉄櫓が開発・採用されたものである（写真3）。

櫓に鉄製の重量物を搭載した重さが出走表に記載されているばんえい重量である。実際に牽引する重量はばんえい重量に騎手の重量が加わる。

騎手の重量は75kg（冬季は厚着をするので78kg）と決められている。75kgに満たない分は重量物を櫓に搭載する。公正確保のため、騎手は体重の不足分に相当する重量物を携帯し、検量を行うのであるが、この騎手が携帯する重量物は通称「弁当箱」とよばれる。したがって、弁当箱の重さは騎手の体重によって決まる。最も小さな弁当箱（つまり騎手の体重が75kgに近い）を携行しているのは西康幸騎手（2007年から調教師）で、マ



写真4 騎手携帯重量物（「弁当箱」）

ッチ箱を一回り大きくした程度に過ぎない。それに対して、最も大きな弁当箱は佐藤希代子騎手のもので20kg以上の重さがあり、大きさも弁当箱というようなかわいらしいサイズではない（写真4）。

櫓と馬体は胴曳きという布製の馬具で連結される。輓馬大会などでは鉄製の鎖を胴曳きに用いているのを見かけるが、輓曳競馬では布製である。一見すると、鎖の方が丈夫そうに見えるのだが、実は布製の方が丈夫なのだそうだ。

胴曳きの一方は馬体に連結されるが、直接櫓の本体に連結されるのではなく、曳き木（通称「どっこい」）とよばれる櫓の部品に連結されている。櫓の本体に胴曳きを直接連結すると、櫓の操作性が悪くなるために、どっこいを介して胴曳きと櫓本体が連結されているのである。

胴曳きに平行して長い棒が装着されている。これは梶棒である。馬櫓の梶棒は引くためではなく、馬が蛇行しないように制御するための道具である。

現在のばんえい競馬で使用されている梶棒はグラスファイバー製である。当然のことながら、かつて産業現場で馬櫓が広く用いられていたときの梶棒は木製である。ばんえい競馬でもかつては木製であったが、競走中に梶棒の破損事故が発生することがままたり、丈夫な代替素材を探していたところ、偶然にも走り高跳びのバーを見た関係者がこれでどうかということになったという逸話が残されている。

④スタートからゴールまで

レース展開を最初から追っていこう。

ファンファーレがなり、ゲートが開くと、馬は一斉にスタートする。このあたりは平地競走と同じである。平地競馬の場合はゲート前方にスタートラインがあるが、ばんえい競馬のスタートラインはゲート後方に設置されている。これは、櫓の後端がゴール線を通過したときがゴールインという軌道競馬のルールに対応している。

一斉にスタートした馬は1障害を越えるまで休まず走る。細かいことをいえば、「走る」ではなく、「歩く」なのだが、1障害を越えるあたりまでは本当に「走る」こともある。ルール上は走ろうと歩こうと構わない。

1障害で詰まる馬はまずいない。1障害を越え、高さも幅も1障害に比べると格段に大きな2障害までは平坦な直線であるが、この1～2障害間の直線で、騎手は馬を何度か止めることが多い。

軌道競馬を初めて観戦した人が一様に口にするのが「なぜ途中で止まるのか」という疑問である。ばんえい重量の大きい競走（高重量戦という）では1障害と2障害のあいだで馬が停止する回数は多い。そして、2障害の下ではほぼ必ず一度馬を止める。これは、途中で息をいれなければ馬の体力が持たないからである。ばんえい重量の小さい2歳戦や、降雨や降雪によって極端に馬場の滑りがよくなった場合（軽馬場という）には、1障害と2障害のあいだで殆ど停止することなく競走がおこなわれることもある。

騎手は、他馬の行きっぷりと自馬の呼吸・気配をはかりつつ、2障害に向かう。このあたりは騎手の技量である。最初から全力疾走すれば、2障害を越える体力・気力が失われ、仮に2障害を先に越えたとしても残りの直線で失速してしまう。平地競馬でも最初から最後まで全力疾走などというレースはない。それと同じだと思っていただけるとよい。

櫓ののって馬に曳かせるだけなら比較的容易である²⁾。実際、筆者もやらせてもらったことがある。単に櫓を曳かせるだけならさほど難しいことではない。だが、競走となれば、当然のことながら、騎手に十分な技量がなくては勤まらない。

最大の難関は2障害である。腰をいれて一気に越えるケースもあれば、何度も腰をいれて越えるケースもある。ほんの少し下がり³⁾、弾みをつけて一気に牽引物を引き上げる。

2) 映画『雪に頼りごと!』の裏話である。女性騎手役の吹石一恵は、吹き替えなしでレースシーンを撮影した。吹石以外はすべてプロの騎手である。プロ騎手たちが最も苦勞したのは、吹石のレース振りに自馬を合わせることだったという。考えてみれば当然で、一流の陸上競技の選手が、素人相手に、本気で走っているように見せながら、なおかつ負けるといふにはかなりの演技力が必要だろう。まして人ではなく馬である。通常の競走より難しかったのではないだろうか。

3) 馬を後ずさりさせ力をためるために、「バイキ」というかけ声をかける。映画でも吹石一恵が「バイキ! バイキ!」と声をかけている。このかけ声は英語の back に由来しているといわれる。

難関2障害を越えた馬は後は一気にゴールを目指す。コースに平行している観客席からははっきりわからないが、体力を消耗し、脚色を失って直線を歩いている馬は、直線走路を小幅に蛇行している。逆に余力をもってゴールをめざしている馬はまっすぐに歩いている。このことは櫛の軌跡をゴール付近からコースを正面から見ると一目瞭然である。

櫛の後端がゴールラインを通過した瞬間がゴールインである。馬がゴールラインをまたいだ瞬間に止まってしまうこともある。その間に後から来た馬が先にゴールインするという逆転もしばしば見られる。観客が大興奮する瞬間のひとつである。ゴールライン付近で大接戦となった場合、着順はにはわかない。何頭もの馬がゴールライン付近に殺到した場合には、着順判定のアナウンスがあるまで勝負がわからないこともある。「残ったか、交わされたか」どきどきしながら判定を待つのもこれまた楽しいものである。

ばんえい競馬最高峰のレースは年度末におこなわれる「ばんえい記念」⁴⁾であるが、このレースの走破タイムは3分を優に超える。輓曳競馬で、もっとも走破タイムのかかるレースである。最高峰のレースの走破タイムがもっとも大きいというのも他の競技では考えられないだろう。

⑤番組編成・レース体系

格付け上位の馬になるほどばんえい重量は大きくなる。また、同じランクの競走馬どうしのレースであっても、賞金の高い特別競走はばんえい重量も重く設定されている。

競走馬の格付けは通算取得賞金額に基づいている。この点は一般的な競馬番組と同様である。現行のばんえい競馬の格付け区分は表1に示したとおりである。ただし、2歳馬は取得賞金額別に別扱いで格付けされる。

ばんえい重量は格付けに応じて基本重量が定められ、格付け上位になるほど基本重量が大きくなっている。例えば、オープン

表1 3歳馬以上の格付け(2006年度の例)

年齢	3・4歳馬		5歳以上
期間	2006/4/15 ~8/21	2006/8/26 ~2007/3/26	周年
区 分	オープン		
	800万円未満		
	650万円未満		
	550万円未満		
	470万円未満		
	390万円未満		
	320万円未満		
	270万円未満		
	220万円未満		220万円未満
	170万円未満		
120万円未満	120万円未満		
	70万円未満		

資料：『北海道市営競馬組合地方競馬平成18年度番組編成要項』

4) 正式な競走名は「農林水産大臣賞典ばんえい記念競走」であるが、「ばんえい記念」というレース名は比較的最近になって付された競走名で、かつては単に農林大臣賞典とされていた。今でも古い人はばんえい記念を「大臣賞典」とよぶ。

馬のばんえい重量は12月以降720kgであるが、8月22日以前の2歳馬のばんえい重量は500kgに過ぎない。

ばんえい重量には新人騎手の減量措置と女性騎手の減量措置が設けられている。女性騎手で通算勝利数が50勝未満の場合は20kgの減量、50勝以上であれば10kgの減量措置がある。男性騎手の場合は、通算50勝未満の場合は10kgの減量が与えられる。また、馬に関わる減量措置は7歳以下の牝馬については20kgの減量となっている。牝馬が牡馬よりも減量されるのは平地競走でも同様であるが、ばんえい競馬で牝馬の減量特典が7歳以下に限定されているのは、優良牝馬については長く競走に供用するより早く繁殖牝馬として供用させようという生産政策的意図に基づくものである。

特別競走はそれぞれ別に定めた重量で施行される。特別競走のなかで、賞金が特に高いレースを重賞競走とよぶ。重賞競走はBG1からBG3まで3段階に区分されている。BG1とはばんえいのG1レースという意味である。2005年度のBG1は表2のとおりである。この年は、蹄の病気で一時期は出走さえ危ぶまれたスーパーベガサスが奇跡の復活をなしとげ、4年連続最高峰のレースであるばんえい記念を制した。

表2 2005年度 BG1一覧

競馬場	施行日	競走名	1着賞金	出走資格	勝馬(性・齢)
旭川	2005年6月12日	第36回 旭王冠賞	250万円	3歳以上	スーパーベガサス(牡9)
岩見沢	2005年10月2日	第41回 岩見沢記念	250万円	3歳以上	アンローズ(牝6)
北見	2005年11月27日	第26回 北見記念	250万円	3歳以上	サダエリコ(牝5)
帯広	2005年12月25日	第34回 ばんえいダービー	200万円	3歳	エンジュダイヤ(牝3)
	2006年1月2日	第28回 帯広記念	250万円	4歳以上	ミサイルテンリュウ(牡7)
	2006年3月19日	第37回 イレネー記念	200万円	3歳	マルミシュンキ(牡3)
	2006年3月26日	第38回 ばんえい記念	700万円	4歳以上	スーパーベガサス(牡10)

⑥競走馬

ばんえい競走馬(ばん馬)は巨大である。平地競馬で供用されるサラブレッドは、大きな馬でも体重550kg前後、小さなものだと400kgに満たない。ばんえい競馬に供用される馬は大きなものだと1,200kg、小さなものでも900kgを超える。

馬格に基づく分類法では、馬は、重種、中間種、軽種、および小格馬に分けられる⁵⁾。平地競走で使用されているのが軽種馬である。具体的な品種としては、サラブレッド、アラブ、アングロアラブ、およびそれらの混血であるところのサラブレッド系、アラブ系の5つである。重種馬

5) 明治期以降、わが国の馬事・馬産の近代化は欧米に範をとっておこなわれたのであるが、馬のこの分類法はわが国独自である。したがって、軽種馬とか重種馬にあたる英語表記は存在しない。

は、ベルシュロン、ベルジャン、クライズデルと
いった大型の品種およびその混血馬である。

複数の品種を交配したものを半血とよび、単一の
品種のみを交配して生産された馬を純血という。ば
んえい競走馬の多くは半血（重種の半血ということ
で重半血とか重系とよばれていた時代もある）であ
る。

ばんえい競走馬を品種別にみたのが表3である。
この表に明らかなように、純血種の馬はベルシュロ
ンがわずかにいるだけで、殆どが半血である。体重

は概ね1トン前後、体高は160～170cmの大きさを誇る。サラブレッドの脚がガラスの脚と称さ
れるように細く繊細であり、そのため骨折・炎症など多くの疾患が脚部に発症することは知られ
ている。それに対して、ばん馬の脚は太く丈夫であり、レース中の骨折などはまず起こらない。

参考までに現役最強と謳われるスーパーベガサス（写真5）の血統表を図2に示す。スーパー
ベガサスの父はこれも名馬としてその名を残すヒカルテンリュウである。ヒカルテンリュウの父
はベルシュロン系のマツノコトブキ、そのまた父は純血のベル
シュロンである二世ロッシーニである。母系の方をたどってみ
よう。母アサヒシャルダン（アメリカからの輸入馬であるベル
ジャン種のマルゼンストロングホースと半血の第二太陽との間
に生まれている）。

スーパーベガサスの例でわかるように、ばんえい競走馬に
は、ベルシュロン、ベルジャンなどの血が流れている。ベルシ
ュロンは牽引力に優れているが、晩成で軽快さにやや欠けると

表3 ばんえい競走馬の品種

品種	頭数（頭）	比率（％）
ブルトン	-	-
ブル系	-	-
ベルジャン	-	-
ベル系	8	1.09
ベルシュロン	4	0.55
ベル系	5	0.68
半血	714	97.67
計	731	100.00

資料：北海道市営競馬組合『平成16年度ばん
えい競馬成績書』



写真5 スーパーベガサス
（2005年8月ばんえいグランプリ優勝時）

図2 スーパーベガサスの血統

スーパーベガサス （半血）牡 栗毛 1996年5月3日生 生産地：帯広市	父	（半血） ヒカルテンリュウ	父	（半血） マツノコトブキ	父	（ベル）二世ロッシーニ	
			母	（半血） 第二太陽	父	（半血）初姫	
		母	（半血） アサヒシャルダン	父	（ベルジ） マルゼンストロングホース	父	（半血）バンツバメ
				母	（半血） アサヒルビー	父	（ベルジ）コントリビユター
					母	（ベルジ）ジャネットスプレムドファルケール	
						父	（半血）タカラコマ
					母	（半血）南山	

注.（ベル）はベルシュロン、（ベルジ）ベルジャン

資料：日本馬事協会

される。その欠点を補うべく導入されたのがベルジャンである。ベルシュロンは明治期に導入された品種で、北海道の開拓を担う農用馬として利用されてきた。大畑作地帯である北海道十勝地方はかつてはベルシュロンの産地でもあり、十勝で生産されたベルシュロンは十勝ベルとよばれ、農耕・使役だけではなく、農用馬の品種改良にも大いに利用された。ベルジャンは時代を大きく下った1970年代前半に導入された品種である。

現在のばんえい競走馬は2歳春のデビュー時に既に1トンを超えている馬も少なくないが、これは品種改良の結果年々大きくなったものである。1964年に体重制が導入されたとき、馬体重800kg以上が最上級の甲級に格付けされた。甲級馬は全登録馬の1割にも満たない数であるから、ごく少数の大型馬でさえ800kgを超えたくらいだったのである。

馬格の大型は馬の用途が変化したことによる。毎年生産される重種馬のうち、ばんえい競馬の競走馬になるのは今も昔もごく一部である。使役に供する場合、馬格が大きすぎる馬は扱いにくくえさ代も嵩む。ところが、使役馬の需要が激減する反面、馬肉の需要が高まり重種馬の生産を支えるようになった⁶⁾。肉用となれば大きい方がいい。また、輓曳の競走馬としてみれば馬格が大きいかほど牽引力は強いとされる。つまり、競走用と馬肉生産の両方から馬格の向上が求められ、その結果、今日われわれが目にする雄大な輓馬が誕生したのである。

3. ばんえい小史

①公営競技ばんえい競馬のはじまり

北海道において地方競馬としてのばんえい競馬が始まったのは1946年である。

1972年に地方競馬全国協会が発行した『地方競馬史』の第2巻には都道府県別ごとに地方競馬の沿革が記載されている。第二次大戦後、地方競馬法（後に競馬法に統合）に基づいて競馬を開催したことのある都道府県はどのくらいあったのか。意外なことに、沖縄県をのぞく⁷⁾全ての都道府県に競馬場があり、地方競馬が開催されたのである。

それほど多数の競走馬や競走馬にかかわる人的資源が1940年代後半の日本に存在したのかという疑問がわく。

6) 映画「雪に願うこと」のなかで、山崎努演じる丹波が、物語の陰の主役でもある競走馬ウンリュウが全く走らないのを見て、「馬刺し！」と怒鳴る印象的なシーンがある。実際のところ競走成績の上がらない馬は肉にするしかない。これはサラブレッドでもほぼ同じであるが、実のところをいえば、競走馬として何年も供用された馬は筋肉が固く発達しているので馬刺しには向かない。上質の馬刺しになるのは1歳くらいから専ら肉用に肥育した若駒が多いようである。

7) 沖縄県は第二次大戦後長らく米軍の施政下にあったことと、『地方競馬史』の発行が沖縄の本土復帰以前であることから、『地方競馬史』には沖縄県の競馬事情は全く記載されていない。

まず、馬資源についてである。そこで競走馬として使用されていた馬の殆どは農耕や運搬に使用される実役馬であり、サラブレッドやアングロアラブといった軽種馬ではない。このことは地方競馬法の施行時の農林省畜産局長通牒に「地方競馬の性格上出走馬は実役馬を主体として競馬専用馬の発生は極力これを避ける方針であるから、云々」⁸⁾(昭和21年12月7日21畜産局第5498号農林省畜産局長通牒各地方長官宛)とあることからわかる。

次に人的資源に着目しよう。当時の開催日数をみると、各競馬場とも開催日数は年間十数日程度である。賞金水準を考えあわせると、当然のことながら、職業として専門的に競馬にたずさわることは困難である。

当時の人馬両方の存在形態を考えると、都市や農村で使役されている馬をかきあつめ、それらに腕自慢・馬自慢の男達が騎乗して覇を競うというのが、当時の地方競馬の実態だった。まさに草競馬で馬券を売ったということである。

地方競馬法に基づいてばんえい競馬を開催したのは、全国でも北海道と青森県のふたつだけのようだが、青森県では競馬場そのものが早い段階で姿を消してしまったことから、当時の実態はまったく不明である。北海道の場合、競走種目は平地競走、速歩競走、ばんえい競走の3種目が実施され、平地と速歩は同日・同競馬場で実施し、ばんえいは日を変えておこなった。

北海道では、高度経済成長期初期の段階に至るまで、多数の馬が実役馬として使役されており、ことばんえい競馬に関する限り、競走馬資源とそれを操る人的資源に事欠くことはなかった。これがばんえい競馬成立の歴史的基盤である。

②プロ競技としての確立

ばんえい競馬の馬事競技面でのルーツであるばん馬大会は「農村娯楽」であったと解説されることが多い。このことは必ずしも誤りとはいえないが、ばん馬大会を開催していたのが農民であったというのは一面的な理解である。ばん馬大会は農村部だけで開催された訳ではなく、札幌、帯広、旭川といった都市部でも盛んに開催された。むしろ、規模的には都市部での開催のほうが大きかったのではなかろうか。働く馬のいるところではどこでもばん馬大会がおこなわれた。

都市部でばん馬大会を開催したのは当時の運送業者が主であった。地方競馬法に基づく公営競技としてばんえい競馬の開催を積極的に推進したのも、農家・農民というよりは運送業者たちであった⁹⁾。

当初4日間で出発したばんえい競馬は、徐々に開催日数を増やしていくが、それでも1960年代

8) 宇井延壽『日本の競馬I法令等の変遷及び主要事項』(近代文芸社、1999年、p.139)所収。

9) 旭川の五十嵐、帯広の山といった人たちが当時のリーダーとして名を残しているが、いずれも運送業者である。

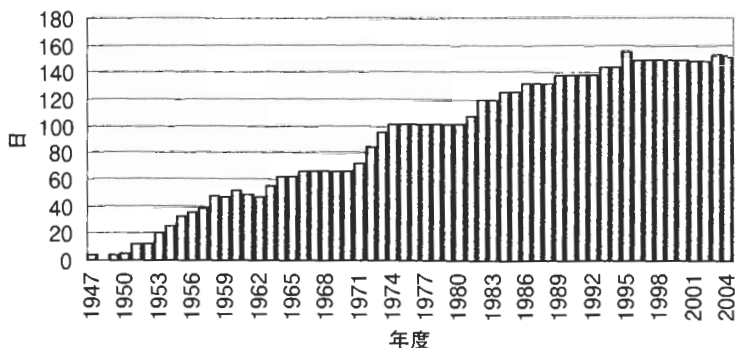


図3 ばんえい競馬開催日数

資料：北海道市営競馬組合

までの開催日数は年間60数日と少ない(図3)。破格の賞金や手当が用意されているわけでもない。したがって、馬も人も輓曳競馬で食っていくことはできない。大部分の人も馬もアルバイト的に輓曳競馬に出走していた。

アルバイト的な大多数の人と馬は地元開催にしか出走しないが、一部のばん馬マニア的な人たちは自慢の愛馬とともに4市を転戦し、賞金稼ぎをするようになる。それでも賞金だけで飯を食っていたわけではなく、競馬が休催となる冬季には冬山造材などで馬と一緒に働いていた。輓曳競馬の最大の見所である2障害越えにおける馬の動作は、山仕事、特に藪出しという作業で見られる動作に酷似している。馬にとってみれば、本職の山仕事の方がばんえい競馬に比べるとずっと過酷な労働だった。

産業現場から馬が姿を消すと、アルバイト的に白らの使役馬に乗って競馬に出場するということではできなくなり、騎手の一部はプロとして競馬に専ら従事するようになる。プロとしてばんえい競馬に専ら従事するようになった人たちは、自分の所有する馬ではなく、馬主から馬を預託されてその馬を使うようになる。

制度的にも馬主と騎手の分離は馬主兼騎手の禁止として推し進められた。次に専ら調教を職分とする騎手(調教騎手)と専ら競走に騎乗することを職分とする騎手(騎乗騎手)の分離がおこなわれ、調教騎手はその後調教師という呼称に変わる。ばんえい競馬の場合、調教師・騎手の分離が完成するのは、最後まで調騎兼業であった中西関松が騎手を引退した1978年のことであった。

③レースの近代化

公営競技としてのばんえい競馬の60年の歴史では様々な改良が重ねられてきた。そのいくつかをとりあげよう。

まず、出走馬の格付けである。発足当初の競走馬は種々雑多な実役馬の寄せ集めであるから馬

格にも大きな差違があった。発足当時は検査員による馬体判定による格付けがおこなわれた。甲、乙、丙、および丁の4区分で、後に丁級がA、Bのふたつに分けられた。馬体検査による格付け区分には出走申込者からの不満も多く、1964年からは体重制が導入された。体重別区分は、牽引力は体重に比例するというを論拠として採用されたという¹⁰⁾。

体重別区分も無理な減量などが横行したため、1973年からは現行の取得賞金制度に変更される。賞金額の変動によって、区分のラインは何度も変更されたが、取得賞金によって格付け区分を行うという方式は定着しそれが今日まで継続している。1973年頃になると、ばんえい競馬は実役馬による段階を脱し、競走馬を目的とした馬産がおこなわれるようになっていた。そのため馬格も向上し、馬格や馬体重の格差が以前に比べて小さくなっていたことも取得賞金制の背後にある。

施設面での近代化にもふれておきたい。

まずはコース形態である。発足当初のばんえい競馬はU字型のオープン走路が用いられてきた。今日もなお道内各地で開催されているばん馬大会ではU字型オープン走路が使用されている。ばんえい競馬の直線走路は1963年に旭川競馬場で採用されたのが最初でその後旭川以外の各競馬場でも直線セパレートコースが採用された。

U字型走路は、当然のことながら、内側コースと外側コースでは有利・不利が生じる。重い櫓を牽引して競走するのであるから、当然、内側コースが有利になる。したがって、スタート直後に内側のコースに馬が殺到することになり、その結果、危険性も高くなり、さらにトラブルや失格といったことも発生しやすくなる。

直線セパレートコースが望ましいとわかっていながら、ばんえい競馬発足後十数年にわたってU字型走路が用いられたのは、櫓の運搬という難題を解決する手段がなかったからである。U字型コースではスタート地点とゴール地点はほど近いので、ゴール後スタート地点までそのまま櫓を牽引すればいい。ところが直線走路ではそうはいかない。

この問題を解決したのが「鉄道」である。ひとつのレースが



写真6 櫓運搬列車

10) 内田靖夫『ばんえいまんがどくほん』北海道市営競馬組合、1978年、p.41。同書はばんえい競馬に関する総合的な解説書で、本稿の作成にあたって最も参考にした文献である。著者内田靖夫はばんえい競馬の父とでもいえる人物で、草創期から1970年代までばんえい競馬をリードした存在であった。文章だけでなく、絵も達者で、同書に描かれたマンガはすべて内田自身の筆によるものである。ばんえい競馬に身を投じる以前にも、自ら文章と挿絵の両方を担当し、軍馬部隊での従軍体験を描いた『馬部隊! (昭和書房、1942年)』という著作もある。なお、絵(マンガ)については、内田は岡本一平に師事したようである。

終わると、橇は地中に掘り込まれたレールに乗った貨車に積み込まれ、スタート地点まで搬送される（写真6）。

橇搬送用の鉄道は当初は、当然のことながら、貨車を馬が牽引する「馬車鉄道」であった。現在ではディーゼル機関車を使用されている。10台の橇を乗せた「貨物列車」が約200メートルの鉄路をトコトコ走る姿は可愛らしい。

④黄金期から衰退期へ

図4はばんえい競馬の売上高¹¹⁾を長期的にみたものである。馬券の売上高は1960年後半から加速度的に増大する。1964年の発売額が5億円だったのが、1967年には10億円の大台に乗り、さらに3年後には約25億円にふくらみ、そのまた3年後の1973年度は100億円の大台に乗るという急成長ぶりである。ばんえい競馬に限らず、この時期、あらゆる公営競技の売上高は大きく伸びたのであるが、そのなかでもばんえい競馬の伸び率は特筆すべきものであった。

馬券売上高は1980年にいったんピークを迎え、その後数年は前年度比マイナスの時期が続く、地方競馬の危機がいわれたのもこの時期である。各地の地方競馬で存廃論議がおこったのであるが、80年代後半になるとバブル景気の到来で馬券の売上高は再度増大傾向に転じ、地方競馬の構造的問題は解決されないままバブル崩壊後、より深化したかたちで露呈することになる。1990年代以降の衰退率の大きいのは、一般的な動向に加え、地方都市の経済の衰退という要因が加わっ

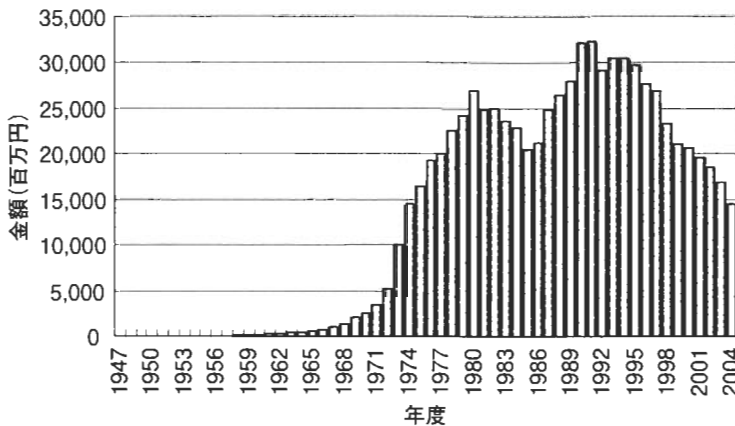


図4 売得金額・発売金額の推移

資料：北海道市営競馬組合

注：1947～1971年度は発売額・1972年度以降は売得額

11) この図では馬券の発売額と売得額の両方が混在している。発売額から買い戻し額を差し引いたものが売得額であるが、古い資料と現在の資料とでは連続したデータを得ることができなかったためやむなく両方を混在させている。両者の差はわずかなので傾向をみるには差し支えない。

ているからであろう

1989年には一部事務組合である北海道市営競馬組合が設立される。それまでは4市が北海道市営競馬協議会を構成し、直接開催業務を担当してきたのであるが、1989年4月1日以降は市営競馬組合が開催業務を担当することとなった。

一部事務組合化は業務の効率性を高めた面はあるものの、その一方で主催者たる4市が一切を組合任せにする無責任体制を生み出した。このことが長期低落傾向に対する対応を遅らせ、深刻な危機的状況につながったという面は見逃せないだろう。

1991年の322億円をピークに売上高は急速に低下していく。これに対して、組合がとった対応は、開催日数のさらなる増大と発売網の拡大であった。帯広コースのロードヒーティング施設の設置によって冬季開催を可能にしたことが開催日数の増大をもたらし、ついに2005年度からは周年開催となった。

ただし売上高が減少を続けるなかで、開催日数を増大させることで、赤字をカバーしようという政策が功を奏したのかといえば、残念ながら功を奏したとはいえない

売上拡大のために場外発売所の設置も積極的におこなわれた。そして、1997年の競馬法改正以降は場間場外発売にも積極的に対応してきた。その結果、発売額の8割弱が場外発売（電話・インターネット投票を含む）をしめるまでになった。だが、こうした施策も売上低落に歯止めをかけることはできなかった。

場間場外発売や電話・インターネット投票の導入が地方競馬の売上低落を止めることができなかったのは地方競馬共通の現象であり、ばんえい競馬だけではない。だが、ばんえい競馬の場合は全国的に馴染みがない競技であり、カメラアングルに工夫がなければ画面で見てもまったく面白さが伝わらない。ばんえいは生で見てこそ面白い競馬である。

馬券の売上高低迷とは別に、21世紀にはいると、ばんえい競馬の文化遺産的側面への注目が高まる。2004年には北海道遺産¹²⁾「北海道の馬文化（ばん馬、日高のサラブレッドなど）」に認定され、2005年10月には、第18回東京映画祭において、根岸吉太郎監督作品『雪に願うこと』が最優秀賞「東京サクラグランプリ」をはじめ、監督賞、最優秀男優賞、観客賞の4冠を獲得した。この映画は鳴海章の小説「轡馬（ばんば）」を原作としたもので、厳寒の帯広競馬場を舞台としている。この映画で初めてばんえい競馬を見たという人も少なくはないだろう。また、2006年春からは、サンズエンターテインメント（野田義治社長）によって、インターネットの動画配信

12) 北海道遺産とは、簡単にいえば世界遺産の北海道版ともいうべきもので、「次の世代へ引き継ぎたい有形・無形の財産の中から、北海道民全体の宝物として選ばれた」（北海道遺産構想推進協議会のウェブサイト）ものである。第1回分25件が2001年に決定された。「北海道の馬文化」は2004年10月に第2回分として決定・公表された。2006年現在52件が選定されている。

および騎手名の欄があり、その次に当該馬の血統などが記載されている。

競馬はブラッドオブスポーツといわれ、競走馬の血統はわれわれ人間とは比較にならぬほど重視される。ばんえい競馬でも、牽引力やスピードといった競走能力については遺伝的要素も無視できないため、生産者や馬主のなかには馬の血統を精査する人もある。とはいえ、サラブレッドほど血統を重視するファンは少ないようである。

次の欄には、調教師名、通算取得賞金、通算成績などが記載されている。取得賞金額はそれぞれの馬の格付けに用いられる。

「競馬は時計ではない」とは走破タイムの偏重を戒める警句であるが、ばんえい競馬の場合はこの言葉がより強くあてはまるかもしれない。とはいえ、走破タイムも無視できない重要な検討材料である。

馬場水分というのも輓曳競馬独特の概念である。砂コースでおこなわれているばんえい競馬の場合は、水分含有率が高くなると、馬場の砂が締まり脚抜きが良くなることに加え、何よりも楯の滑りが良くなり、牽引力が小さくて済むため時計が早くなる。ばんえい競馬では降雨や降雪により馬場の水分含有率が高い状態を「軽馬場」とよんでいる。

近走の戦績は、おそらく、どのファンも最も重視する要素であろう。ばんえい競馬の場合は、出走したレースの日付、格付け、着順、その時の馬場水分、走破タイム、騎手名、負担重量、出走時の馬体重などの一般的な情報に加え、2障害越えに要した時間や、2障害を越えてからゴールまでの時間といった輓曳競馬特有の情報が記載されている。

馬券は、2006年度現在、単勝、複勝、枠番連勝複式、馬番連勝複式、および馬番連勝単式の6通りが発売されている。本命馬の負ける頻度、もしくは人気薄の馬が1、2着にはいる（「連に絡む」と表現される）頻度は、他の競馬種目に比べると多いように思われる。つまり本命サイドでの決着が比較的少ないのである。

この現象は競馬番組の編成方法によるところが大きいように思われる。重賞競走や特別競走では、一般競走に比べてばんえい重量が大きく設定されている。したがって、スピードより力のある馬が優位である。優秀なばん馬とは牽引力のある馬である。ところが、ばんえい重量の小さい一般競走では力はなくともスピードに優る馬が有利となる。それゆえ、ふだん重賞競走で有力視されるような馬が一般競走では簡単に負けてしまうことも多い。これは平地競走にはあまり見られない現象であろう。端的にいえば、多少弱い馬でも勝つ機会を与えるように番組が編成されているともいえる。

5. おわりに ばんえいの再生にむけて

2006年11月27日渡辺孝一岩見沢市長がばんえい競馬の存続を断念する旨を、同日、砂川敏文帯

広市長が帯広市単独での開催は困難であり、現時点において存続は難しい旨を、それぞれ表明した。すでに旭川・北見両市は開催の断念を表明していたため、この段階で「ばんえい競馬廃止」の報道が全国を駆けめぐった。一地方競馬の廃止がこれほど大きく報道されたことは未だかつてなかったと思われる。

だが、周知のように、一度は廃止が決定的になったばんえい競馬は、ソフトバンク系列会社の支援によって存続が決定し、2007年度からはまったく新たな枠組のもとで再出発することになった。

本稿を締めくくるにあたり、存廃問題の経緯を概観し、ばんえい存続の意義、さらにはばんえい再生への課題を述べることにしたい。

①存廃問題の経緯

1990年代後半、ばんえい競馬の馬券売上高は減少し続ける。1998年には単年度収支が赤字となり、2005年度まで8年連続の赤字となってしまった。こうした事態を打開するため、2004年6月には磯田憲一旭川大学教授を座長とする「ばんえい競馬のあり方を考える懇談会」（以下、懇談会）が設置され、懇談会での議論を踏まえ、2005年2月「ばんえい競馬経営再建5箇年計画」（以下、5箇年計画）が策定された。

しかしながら、再建5箇年の初年度にあたる2005年度も計画額を大きく下回る売上高しかあげることができず、新たに関係者による改革検討プロジェクトチームが発足する。改革検討プロジェクトチームは2006年9月に、4場開催の断念、市営競馬組合の解散、累積債務は4市均等で精算、報償金（賞金・手当）の大幅減額、および新体制による帯広を含む2場での開催を骨子とする検討案を発表した。

ところが10月になると旭川市・北見市の両市がばんえい競馬からの撤退を表明する。この段階で、岩見沢・帯広の2市2場での開催がほぼ決まったかに思われた。砂川帯広市長は存続に前向きであったし、新聞報道などを見る限り、渡辺岩見沢市長も岩見沢でのばんえい競馬開催には必ずしも否定的ではなかった。2市主催による開催にむけ、帯広市は岩見沢市との協議にはいった。

だが、岩見沢市の行政当局はばんえい廃止へ積極的に動き出す。岩見沢市において「ばんえい競馬のあり方を考える有識者会議」が組織され、11月10日に初会合が開催され、初会合からわずか11日後の21日に開催された2回目の会合では、岩見沢市に対してばんえい競馬の廃止が答申された。岩見沢市では存続を求める署名活動もおこなわれていたのであるが、この有識者会議では存続を求める声はいっさいなかったという。予め廃止を答申すべく組織された会議である可能性が極めて高い。存続を考える市長に対して行政当局が待ったをかけるために仕組んだ有識者会議

であったといえよう。

以上の経過を経て、本節冒頭の岩見沢・帯広両市の市長の声明がおこなわれたのである。

だが、岩見沢市の有識者会議での議論の内容が、存続に否定的なものであるという情報を入手していた関係者は、新たな枠組による存続への道の模索を開始する。

11月27日の両市長の声明を契機として、存続を求める運動が次々に開始される。市長声明の翌日には、存続運動をよびかけるウェブサイトが北見市の市民によって開設され、29日には足寄・本別・陸別町馬事振興会青年部が「ばんえい競馬存続を願う生産者の緊急集会」を開催し、存続嘆願の署名活動を開始する。同じ29日地元帯広市では市民グループ「ばん馬を愛する十勝の会」（以下、十勝の会）が発足し、署名活動を中心とした活動を開始する。また、懇談会のメンバーでもあったフリーアナウンサー矢野吉彦氏（競馬ファンあいでは中央競馬の実況中継でも有名である）ら4人の連名で「つづけよう！ばんえい競馬」というサイトが30日に開設され、存続に向けた提案を広く募集しはじめた。

12月1日、十勝の会と調騎会（調教師と騎手の団体）が共同し、存続を求める街頭署名活動を帯広市街でおこない、さらに馬とともに市内パレードをおこなった。こうした存続への動きはマスコミの注目するところとなり、12月6日にはテレビ朝日の報道ステーションで特集が組まれたのはじめ、北海道の内外で盛んに報道されるようになった。署名活動は、札幌や軽種馬の生産地である日高支庁管内を始め、全国的な規模で活発におこなわれた。

こうした存続要求の動きのなかで、既にインターネットによる地方競馬の全国発売を手がけているソフトバンク・プレイヤーズと、帯広市をはじめばんえい競馬関係者との協議が水面下でおこなわれ、12月14日、砂川帯広市長と藤井宏明ソフトバンク・プレイヤーズ社長との共同記者会見において、ソフトバンク・プレイヤーズによるばんえい競馬支援と2007年度の帯広市による単独開催が正式に発表されるに至った。

②ばんえい競馬存続の意義

今回のばんえい競馬存続の最大の意義が、世界で唯一の馬事競技であるばんえい競馬が何とか残り得たことであることは改めていうまでもないが、今回の存続議論の過程を通じ、競馬、特に経営悪化に苦しむ地方競馬全体にとっても有意義な論点が浮かびあがる。

まず、特筆すべきことは、今回の存続運動を担った人々の多くは必ずしも馬券ファンではなかったということである。地元帯広でさえ忘れ去られがちになっていたばんえい競馬というものが、多くの市民に対して訴求力をもっていたという事実である。「馬」というものに対する郷愁や思い入れから、署名活動に応じた北海道民は実に多かった。つまり、ばんえい競馬は、財政寄与の有無という主催者の狭量な思惑を越えた、一種の文化施設の意味をもっていたということが

明らかになったのである。

このことは、地方競馬に対する存廃論議にひとつの論点を啓示するものではないだろうか。すなわち、北海道ほどではないにせよ、馬を好む人々は決して少なくはないはずである。馬券による損益（つまり財政寄与）だけではなく、地域資源として競馬を活用する方向もあり得るのではないだろうか。もちろん、それですべてが解決するというほど、今日の地方競馬問題は簡単ではないことは承知している。だが、少なくとも、決して狭くはない競馬場という施設と、そこで働く高度に訓練された馬と高度な専門技術を持つ人々を馬券以外でも活用できるとすれば、地方競馬は貴重な地域資源として存在しうるのではないだろうか。

次に、今回のソフトバンク・プレーヤーズの登場は、改正競馬法を初めて本格的に運用したものであるという点も指摘しておきたい。

すでに、競艇や競輪では、独立場外発売施設をはじめ、競技実施、舟券・車券の発売など、民間資本の活用がかなり進んでいるが、競馬法の改正にも関わらず、地方競馬においてはこうした動きはまだ大きな動きにはなっていない。

ソフトバンク・プレーヤーズ（直接的には2007年2月1日に設立された新会社であるオッズパーク・ばんえい・マネジメント株式会社が担う）の具体的な動きは、本稿執筆時点では明らかにはなっていないが、民間資本の参入による硬直化した競馬事業運営の改革に期待するものは大きい。さらに、ここでの成果が地方競馬全体へのひとつのモデルを形成する可能性もある。

③今後の展望と課題

新会社への業務委託による経営改善効果は小さくはないにしても、ばんえい競馬の馬券売上高がV字回復に向かうとは、正直なところ、考えづらい。

年が明けた2007年1月30日、帯広市と日本馬事協会の共催で、「ばんえい競馬の未来を考えるシンポジウム」が開催された。この席上、ソフトバンク・プレーヤーズの藤井社長は「全員参加型で進める新生ばんえい競馬」と題して講演した。このタイトルには、新たなばんえい競馬の方向が集約されているといっても過言ではない。

藤井氏ら3名の基調講演の後おこなわれたパネルディスカッションでは、競馬場を『道の駅』にして十勝の産品を提供する場にしてはどうかという提案や、ばんえい競馬と競馬場を観光拠点として位置づけるべきだ、さらに、女性や子どもが遊べる場所にしてほしいといった意見が数多く出された。このパネルディスカッションで出された意見を敢えてまとめると、ばんえい競馬ないしは競馬場を帯広・十勝地方の地域資源として活用しようということになる。

「全員参加型で進める」ということは、まさに、馬券以外の「参加者」をどう形成していくかにかかっている。きわめて単純な話であるが、馬券発売額の約75%は的中者への払戻にあてられ

る（購買者にとっては、宝くじやサッカーくじよりはるかに有利なギャンブルである）。したがって粗利益は売上高の約25%にすぎない。初めてばんえいを観戦する観光客や、そもそもギャンブルに関心のない人に1万円分の馬券を売ることは困難かもしれないが、馬櫓や乗馬の体験、さらにはグッズ販売や施設見学などを通じて、2,500円のお金を落としてもらうことはそう難しいことではあるまい。

ばんえい競馬のファンにとって、それぞれ特徴のあった4つの競馬場での開催がなくなったことはさびしい限りではあるが、帯広市1市での開催になったことは、「世界でも帯広にしかない」という希少価値を高めたともいえる。

財政寄与という枠組から事実上脱却し、北海道固有の地域資源としてばんえい競馬を多面的に活用しうるか否かが、今後のばんえい競馬の課題であり、逆に、これを実現しうるときにこそ未来への展望があるといえよう。また、ばんえい競馬ほどの希少価値はないかもしれないが、その分一般性をもっているサラブレッドによる他の地方競馬（競馬場）にとっても、馬事文化・スポーツの拠点として、地域住民の共有資源・社会的資本として活用・開放されることによる生き残り戦略を提示するモデルとなる可能性もある。

付記

本稿は2005年9月のギャンブリング*ゲーミング学会における報告をもとに、その後の情勢変化などを加えて作成したものである。学会報告および本稿の作成にあたっては、北海道市営競馬組合や農用馬の生産者をはじめ数多くの人々から多大なるご教示をたまわった。お名前をあげることはできないが、ここに深く御礼申し上げる次第である。

Japanese Journal of Gambling & Gaming Studies

Number 3

March 2007

Articles

- A Study on the shape of the Japanese Chess Pieces Kumazawa, Ryoson
A Pin with All Heart and Soul —A History of Pachinko Originated by Masamura Takeichi—
..... Suzuki, Emiko
Money Laundering in Casino Business Chujo, Tatsuya
Urban Tourism Policy for Tourists' Cities Hashizume, Shinya
Banei —Draft Horse Race in Japan— Furubayashi, Eiichi
Religious Influences on Chess Yukawa, Hiroshi

Published by Japan Academy of Gambling & Gaming Studies

Osaka, Japan

ISBN978-4-902988-02-4